

悪化する戦況 克明に

航空部隊「帰れるもの1機」

終戦工作に尽力したことで知られる海軍少将・高木惣吉の遺品からは、日独航空路の飛行計画のほかにも、新たに約20点の資料が発見された。日々、悪化していく戦況や部下に贈った送別の辞などが記されている。専門家は「高木は多くの記録や手記を残したが、戦後75年が過ぎても発見があることに驚く」と語る。

(出水翔太郎、本文記事1面)

資料20点 今なお発見 専門家驚き

戦後75年



高木惣吉 (川越さん提供)

△航空(機)に対する作戦上の要求は、現有の実力以上に過大▽△全力を尽くすも要求に追従できず悲鳴

高木惣吉 熊本県人吉市出身の海軍軍人。海軍大学校を首席で卒業し、駐仏武官や海軍省調査課長などを歴任し、主に情報部門を歩んだ。終戦工作に奔走したことで知られ、当時の状況を記録した日記やメモ類は第一級の資料とされる。1979年、85歳で死去した。

を上げる▽

1942年11月に記された34頁にわたる「参謀長会議聴取覚」にはこう書かれていた。

高木は当時、舞鶴鎮守府の参謀長を務めており、資料は、海軍省(東京)で開かれた会議に出席した際に、首脳の発言を書き取っ

たものとみられる。この頃、

米軍は圧倒的な戦力で太平洋のソロモン諸島に押し寄せていた。

△(空母) 瑞鶴の搭乗員半分消耗▽△基地より発進した(航空部隊の)中攻隊のうち完全に帰れるもの1機のみ▽とし、悪化する戦況を伝えている。

43年2月に作成され、「軍極秘」の印が押された「1月中の通信謀報総合」という資料には、△敵(米)は北方に於いて艦船航空機と指揮官を西方に移動▽と記されており、米軍の動きが勢いを増していることが

九州豪雨直前 資料移す 高台の記念館に

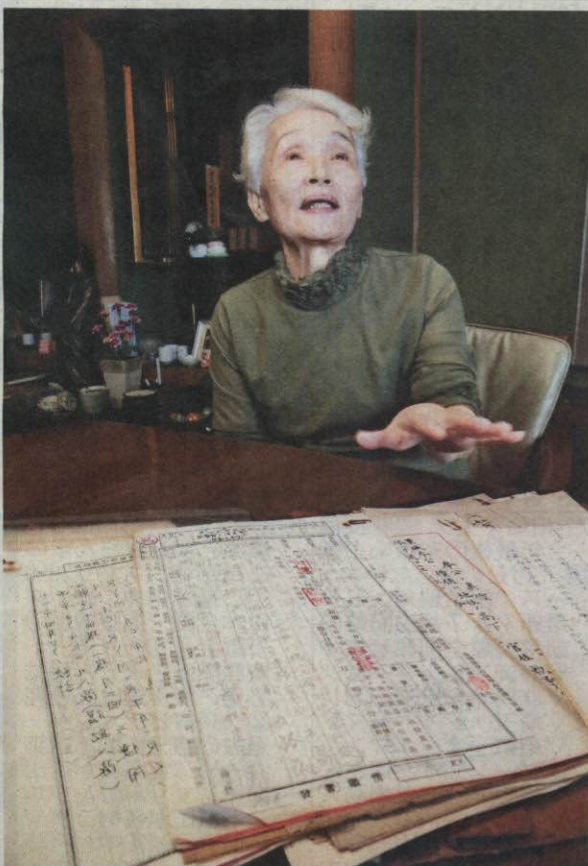
資料を見つけた川越郁子さん(73)の父親、重男さん(故人)は、高木のいとこにあたる。高木の遺品は重男さんが引き継ぎ、その後、川越さんが保管することになった。2010年には、人吉市内で経営する旅館の敷

45年8月、神奈川・厚木の海軍飛行場で、無条件降伏に反対する海軍将校らが起こした騒乱事件の状況をまとめたメモもあった。

高木は情報部門での勤務が長く、日々の軍や政治の動きを日記にまとめ、多数の資料を残していた。大戦末期には、元首相の米内光政や海軍大将の井上成美らとともに戦争の終結に向けて尽力した。

地に、私設の「高木惣吉記念館」を開設し、約1000点の資料の展示を始めた。発見のきっかけは、郷土史家の何げない一言だった。「コロナで来館者が少ない今のうちに、徹底的に資料を探し出しませんか?」。今春、そう提案したのは熊本県錦町の福田晃市さん(48)。県内の戦争遺構の調査などに取り組み、記念館の運営も手伝ってきた。

高木に関する著作がある海軍研究家の工藤美知尋さん(73)は「広い視野を持った高木の人柄をうかがわせる。機密資料は記録のために保管していたのだろう。当時の状況がよく伝わってくる」と話す。



高木が残した資料を前に思いを語る川越さん(熊本県人吉市の高木惣吉記念館で)＝田中勝美撮影

一連の豪雨で記念館より約20分低い場所に立っていた自宅は、球磨川が氾濫し

天然温泉付住宅型有料老人ホーム

入居時は敷金のみ! 自立から要介護まで!

スパビレッジ・ホリカワ

久留米市花畑3丁目18番1 ☎0942(31)3600

外科・内科・心療内科・精神科 介護老人保健施設

医療法人 堀川病院 サンダイヤル

☎0942(38)1200(代) ☎0942(31)1255

www.horikawa.or.jp

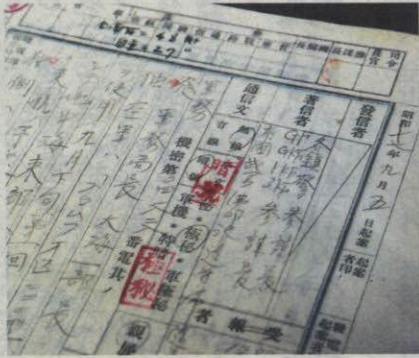
幻の日独航空路資料

を目的に、航空機による連絡の確立を進めたことが明らかになっている。

第2次大戦中、日本とドイツが開発を目指した航空路の飛行計画とみられる資料が、熊本県人吉市で見つかった。航空機の飛行高度、経由地など運用の細部が記されていた。日独を結ぶ定期航空路は最終的に実現しなかった「幻の計画」とされる。戦後75年が過ぎ、その一端が浮かび上がった。

資料は数あり、同県出身の海軍少将・高木惣吉の子孫にあたる川越郁子さん(73)が自宅などで保管していた。

日本は戦前から、約90000キ離れたドイツへの航空路の開設を模索。1940年に同盟を結んでからは、首相・東条英機やドイツのヒトラーらが、迅速に外交使節団を派遣することなど



日本とドイツを結ぶ航空路の運用計画について書かれた資料。「極秘」の印が押されている

戦時中に計画 熊本で発見

発見された資料は42年9月5日作成で、「極秘」の印が押されている。海軍の重要拠点だった舞鶴鎮守府(京都)に宛てた通信文を記録したものとみられる。高木は当時、同鎮守府の参謀長だった。

資料によると、ドイツは同月下旬、地中海東部から飛行艇を派遣する計画を立て、日本側は海軍が支援することになった。経由地は、ペナン(現マレーシア)とマンラ(同フィリピン)で、目的地は茨城・霞ヶ浦。飛行高度は500〜2000メートルで、不時着地として香港や鹿児島など

6か所を指定した。連合国軍機と区別するため、ペナン以東を飛行するときは、主翼と胴体に日の丸を描くことも示した。

資料には「極秘裏に毎月2往復程度の実施を考慮している」との記述もあった。しかし、日独間には広大な連合国の領土が広がっていたことなどから、最終的に定期航空路は開設されな

いまま敗戦を迎えた。日独の航空路に詳しい成城大の田嶋信雄教授(国際政治史)は「日本側が具体的に受け入れ準備を進めていたことを示す資料は目にしたことがない。両国が真剣に航空路の開設を追求していたことを裏付ける内容だ」と話している。

〈関連記事25面〉